

特別支援学校における通路中央線による安全教育の実践研究

—校内環境ユニバーサルデザインの観点から—

大阪府立和泉支援学校 麻生川 理詠
北山 晃司
清家 耀平
武田 智也
藤原 太一
四天王寺大学 長澤 洋信

I. 問題と目的

児童生徒への安全教育は、児童生徒が安全に学校生活を送ることだけでなく、安全かつ安心できる地域生活のために欠かせない。平成 29 年特別支援学校学習指導要領解説では、安全教育について「身の回りの生活の安全、交通安全、防災に関する指導や、情報技術の進展に伴う新たな事件・事故防止、国民保護等の非常時の対応等の新たな安全上の課題に関する指導を一層重視し、安全に関する情報を正しく判断し、安全のための行動に結び付けるようにすることが重要である」と指摘しているように、情報化やグローバル化によって変化する環境に応じて、安全教育に求められる内容も多様化しつつある。

特別支援教育の対象である児童生徒の安全教育に焦点を当てると、村上ら(2018)が「交通安全における指導や対策では知的障害や自閉症スペクトラムへの観点は十分ではない」と指摘しているように、その特性に応じた交通安全指導は不十分な状況にある。また、学校教育での具体的な実践事例や先行研究もあまりみられない。障がい特性に応じた指導の不十分さは、

安全教育全体の課題であると考えられる。

大阪府にある A 支援学校では、20XX-2 年度より、ユニバーサルデザイン (universal design: 以下、UD) に観点を置いた学校環境の改善を研究テーマに設定し、安全教育に関する課題を整理した結果、「校内統一のサイン表示」及び「通路の安全性向上」を優先課題ととらえ、そのあり方を検討してきた。本研究では、知的障がいのある児童生徒が在籍する特別支援学校である A 支援学校において、校内環境の UD 化を図る観点で設置した通路の中央線について、安全性の向上及び安全教育の観点からその教育的意義を検証することを目的とした。考察では、安全性や安全教育における教育的意義の検討だけでなく、広く社会生活につながる学びの観点から検討する。

II. 方法

1. 対象

本研究の対象は、大阪府の知的障がい特別支援学校である A 支援学校 (小・中・高等部設置、児童生徒数 306 名、教員数 143 名) である。その中で、「UD プロジェ

クト」チーム（以下、UD-PT）と称した教員組織を編成し、実践研究の実施者として、校内環境のUD化に関する検討・実施・検証をおこなった。なお、このUD-PTは、学校長の学校経営方針に基づいたマネジメントによって、校務分掌等の組織に属さない横断的なチームである。

2. 期間

A支援学校の「UDプロジェクト」自体は20XX-2年11月から20XX+1年3月の取り組みであるが、本研究では、20XX年4月から20XX年12月の取り組みを対象とした。

3. 本研究の手続き

本研究の実施にあたり、筆者らの役割を整理する。第1筆者はUD-PTの責任者であり、企画運営及び検証作業実施の役割を担った。第2・3・4・5筆者は、UD-PTの構成員であり、情報収集、中央線設置、分析及び検証作業を分担した。第6筆者は、学外の協力者として参画し、企画及び分析・考察作業を担った。

(1) これまでの研究の経緯

A支援学校の「UDプロジェクト」が開始された20XX-2年11月当初の学校環境は、廊下や階段等の共有スペースの利用に関してルールは特に設定されておらず、児童生徒の通行状況を見ながら、各教員が状況に応じて指導していた。そのため、特に通行量が多くなる昼休み時間等は、多くの児童生徒及び教員が不規則に行き交う状況となり、衝突等の危険性を感じる教員も少なくなかった。

UDの観点による校内環境改善に向けて、改善の必要性の高い箇所を選定する必要があると考え、20XX-2年12月、通行時の安全性に課題がある箇所や対策に関して、学年主任を通じて教員に任意で

意見を求めた。その結果、危険性の高い箇所として、通行が集中しやすい通路や階段が指摘され、改善に向けた対策については「片側通行のルール化」が挙げられた。UD-PTの議論の中で、もっとも危険性の高い階段の通行ルールの改善を求める意見もあったが、階段の手すりが片側しかないため、片側通行のルール化によって新たな危険が生じるおそれがあった。

これらの課題に対して、UD-PTでは児童生徒の発達段階や認知レベルを基準とした「校内安全や利便性を図るためのUDの観点」と、地域生活への接続性・連続性を基準とした「将来にわたる地域生活での安全に対応できる学習のためのUDの観点」で検討した。学校環境において、児童生徒・教員問わず多くの人が行き交う通路では、一定の規則性があることで安全が守られると推測される。昨今、コロナ禍におけるソーシャルディスタンスへの意識づけもあり、公共施設や商業施設において、足形や目的別の導線・停止線等、さまざまな案内や注意喚起の表示がみられる。学校教育においても、UDの観点をを用いて、誰もが理解しやすい安全性に留意した環境設定は、学校生活の安全面の確保はもとより、社会生活への連続性の観点からも重要である。以上の観点から、地域生活への汎用性も考慮しつつ、発達段階が多岐にわたる児童生徒が在籍する知的障がい特別支援学校に適した、UDの観点を生かした通行ルールの提示が必要であると考えた。

これらの問題意識と検討過程を経て、もっとも通行量が多い通路の一つである校長室前廊下(長さ16.65m,幅2.85m)に、試行として児童生徒が登校しない夏季休業中(20XX-1年7~8月)に中央線を設置した。中央線設置については、多くの教員から肯定的な反応が見られたが、片側

通行については、右側・左側のいずれを採用すべきか、教員間でも意見が分かれた。実際、校区の主な商業施設や駅構内では左側通行を促す掲示と右側通行を促す掲示が混在しており、法律や先行文献等をレビューしても片側通行について統一的な見解はみられなかった。一方、道路交通法 10 条 1 項では「歩行者の右側通行」を義務づけていることから、UD-PT の議論の結果として、地域生活においても安全に通行できる認識を育成するためには、右側通行が妥当であろうという結論に至った。

その後、職員会議における了承を経て、20XX-1 年 9 月に、校長室前廊下の中央線を本設置した。通行方向を示す矢印を掲示するなどの取り組みを継続した結果、教員からはおおむね肯定的な意見がみられたが、今後の継続・改善を判断するために、中央線設置が安全な通行に資する取り組みになっているのか、また知的障がい教育における安全教育の一つとして教育的意義があるのか、具体的な検証が必要となった。

(2) 中央線設置と VTR 撮影による検証

中央線設置に関する目的を改めて整理し、学校全体で共有した上で、中央線を設置した。設置箇所については改めて検討したが、「出入口の見通しが悪く、曲がり角で衝突の危険性がある」「児童生徒・教員・保護者が多く通行する場所でデータを収集しやすい」「直線の長い廊下であるので、左右に分けやすく生徒も理解しやすい」等の理由から、校長室前廊下を対象として選定した。また、意識を促す視認性の高い掲示を検討し、床面の矢印や誘導用立体物を追加配置した。

さらに、中央線設置の効果を客観的に観察するために、20XX 年 5 月 17 日～6 月 18 日の期間で、昼休みで多くの児童生徒・

教員が行き交う 12:50～13:20 に定点カメラによる人物動線の VTR 撮影を実施した。具体的には、「中央線と黄色の矢印を片側 3 か所に等間隔に設置した状態」をレベル I と位置づけ、「水色・ピンク色の矢印を等間隔に設置し、かつその間に同色の小さい三角マークを設置した状態」をレベル II、レベル II に加えて「中央線両端に誘導用立体物（通称「ハリボテくん」）を設置した状態」をレベル III（図 1 及び図 2）と設定し、VTR 撮影を実施した。VTR の分析は、表 1 の検証基準に基づき、第 1 筆者が中心となって実施し、全執筆者で共有・確認した。

さらに、6 月 21 日～10 月 17 日の期間

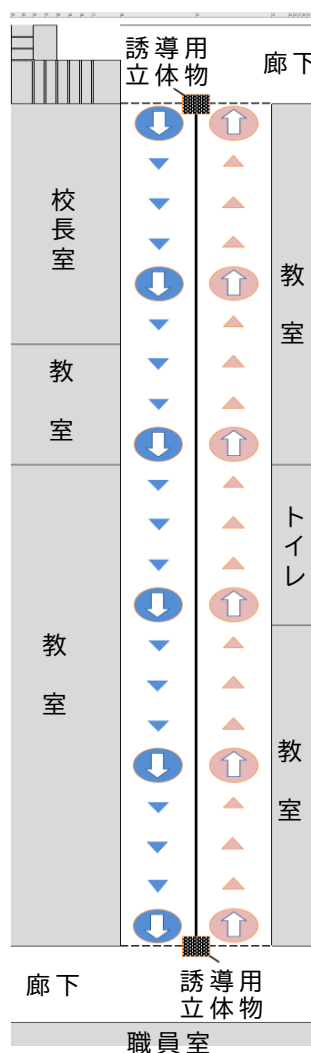


図 2. 通路写真

※レベル III 設定の矢印や三角マークは、職員室に向かう方向を水色、反対方向をピンク色で統一した。
校長室前廊下の床面はフローリングで、矢印等の掲示物は、テープの薄さや貼り付けの簡便さを重視して、セロハン粘着テープで張り付けた。誘導用立体物は、段ボール製で、内部に転倒防止のための重りを設置した。
幅: 24.0cm
奥行: 23.0cm
高さ: 122.5cm。

図 1. 通路設置図

(約 40 日間の夏季休業を含む) でレベルⅢ設定を継続したのち、中央線設置の効果を比較検討するために、20XX 年 10 月 18 日～22 日に VTR 撮影を実施した。VTR 撮影のスケジュールは表 2 の通りである。

表 1. 人物動線 VTR 検証基準

| | |
|--------------------|--|
| 【目的】 | 該当箇所を往来する児童生徒及び教員を対象に、「進行箇所・進行方向のルールに従って通行している」行動の割合を検証する。 |
| 【ルールに従って通行と判断した行動】 | 矢印に沿って片側通行をしている。または、間違っているが、途中で気づいて修正できる。 |
| 【検証方法】 | 指定時間に通行した人数に対して、教員・児童生徒それぞれの「右側通行ができていない」人数の割合を算出した。通行時の状況(単独通行、他者と一緒に通行等)は問わない。また、人流に沿って通行している者も同様とした。途中で修正した児童生徒は、自主的にできたケース及び教員が指導したケースも含む。 |

表 2. 人物動線の VTR 撮影スケジュール

| | |
|---------------------------|------------------------------|
| ① 5/17～21 (5 日間計 5 回) | レベルⅠ：中央線と黄色の矢印(片側 3 か所) |
| ① 5/24～28 (5 日間計 5 回) | レベルⅡ：中央線と色別矢印(片側 6 か所)と三角マーク |
| ② 5/31～6/4 (5 日間計 5 回) | レベルⅢ： レベルⅡ+誘導用立体物 |
| ③ 6/7～11 (5 日間計 5 回) | レベルⅡ：中央線と色別矢印(片側 6 か所)と三角マーク |
| ④ 6/14～18 (5 日間計 5 回) | レベルⅠ：中央線と黄色の矢印(片側 3 か所) |
| ⑤ 10/18～22 (5 日間計 5 回) | レベルⅢ： レベルⅡ+誘導用立体物 |

(2) 中央線設置に関する教員アンケート

教員の視点から中央線設置の効果と教育的意義を明らかにするために、20XX 年 12 月に教員アンケートを実施した。「問 1. 教員が中央線を意識して歩いているか」「問 2. 児童生徒が中央線を意識して歩いているか」「問 3. 教員が片側通行を守ることに、指導上の意義があるか」「問 4. 児童生徒が片側通行を守ることに、学習または社会参加における意義があるか」の設問について、5 件法で選択回答を求めた。

また、設問③・④については、その理由について自由記述で回答を求めた。

回答結果の分析では、選択回答については単純集計を実施した。また自由記述回答については、教員それぞれの視点から多様な内容が記されていることから、テキストマイニングによって傾向や関連性を質的に分析することとした。テキストマイニングは、テキストを客観的に分析することで、テキストの大筋を把握し、テキスト中にある構造や関連性を明らかにする上で有用である。本研究では、樋口(2020)が開発した KH-Coder(Version: 3b04a.exe)を用いて、まず抽出後の出現数を求めた後、特徴を把握するため「抽出語×外部変数(学部)」について、共起の程度が強い語を結び図式化した共起ネットワークの分析を実施した。

Ⅲ. 結果

1. 中央線設置による効果の検証

人物動線の VTR 撮影による効果検証については、日常的な状態を観察する必要があるため、教員には撮影期間のみ開示し、詳細設定は伏せて実施した。人物動線 VTR 撮影による通行状況及びその経過は、表 3 及び図 3 の通りである。

VTR の詳察分析によると、期間①では、通行表示が少ないこともあり、教員の意識の定着がまだ低く、児童生徒に指導する様子も少なかった。児童生徒についても、自分で矢印を意識して通行している姿は少なかった。期間②では、次第に教員が児童生徒に指導する姿が見え始めた。児童生徒の中には、矢印の存在に気づき、マークを一つずつ踏みながら歩く姿や、同方向に歩くスペースが詰まっていると自分でペースダウンして歩く姿も観察できた。

期間③では、通路の歩き始めに歩行の

表 3. 人物動線 VTR 撮影による通行状況の結果

| 期間 | レベルと設定 | 教員 (%) | 児童生徒 (%) |
|----------------|----------------------|--------|----------|
| ① 5/17 ~21 | I 中央線・黄色矢印設置 | 73.8 | 51.8 |
| ② 5/24 ~28 | II 中央線・色別矢印等設置 | 87.8 | 67.0 |
| ③ 5/31 ~6/4 | III レベルII + 誘導用立体物設置 | 95.3 | 87.6 |
| ④ 6/7 ~6/11 | II 中央線・色別矢印等設置 | 93.0 | 85.0 |
| ⑤ 6/14 ~6/18 | I 中央線・黄色矢印設置 | 90.9 | 68.4 |
| ⑥ 10/18 ~10/22 | III レベルII + 誘導用立体物設置 | 95.6 | 87.9 |

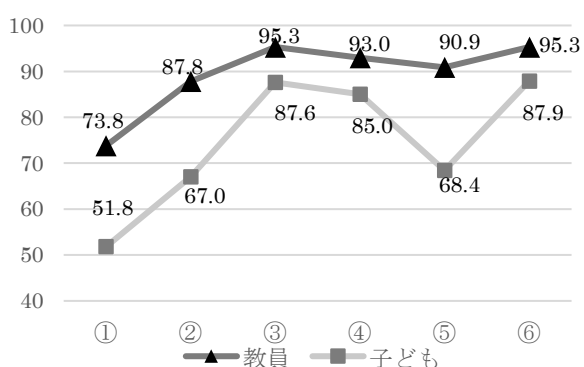


図 3. 人物動線 VTR 撮影による通行状況の経過

ルールを確認できると期待した誘導用立体物の効果もあり、期間①・②以上に片側通行を意識する教員・児童生徒が増えた。このことで全体的に右側通行の人流が現れ、通行する人のほとんどが、自然に規則的な移動ができていく様子を確認できた。児童生徒の行動については、右側通行をしている友だちに習って一列で歩く姿、自分のペースで進みたいが周囲に合わせてペースダウンする姿、さらには必ず足元のマークを一つずつ踏みながら通行する自閉症スペクトラム特性のある児童生徒などがみられた。

期間④では、誘導用立体物がないことで、廊下の真ん中を歩く様子等、一部の児童生徒に中央線への意識が薄れているように感じたが、色別の矢印が継続してあるため、右側一方通行への意識は保たれていた。期間⑤では、教員はほぼ変わらな

い様子だったが、児童生徒では視覚掲示に対する注意意識が薄れる者が多く、前週より 16.6 ポイント下落した。このような検証結果から、最も効果が高かったレベルⅢを継続し、およそ 4 ヶ月後に効果を検証した期間⑥においては、同じ設定の期間③とほぼ同様の数値であった。結果、教員・児童生徒双方とも、誘導用立体物を用いた誘導設定がもっとも片側通行を意識する傾向みられた。

一方で、さまざまな学部・学年の子どもが行き交う廊下だからこそ、歩くスピードに差があり、そのため、制限のある幅を歩く際、自分のペースで歩くことができず、前の歩行者を抜かしたくても抜かせないジレンマを抱えている様子の教員・児童生徒がみられた。そのような理由で、衝突を回避しながら中央線を一時的にまたいで通行する教員・児童生徒の姿も、一部で観察できた。

2. 中央線設置に関する教員アンケートの結果

中央線設置の取り組みの成果と課題を把握するための教員アンケート調査を実施した結果、質問項目すべてに回答のあった有効回答数は 85 (回収率 59.4%) であった。五件法で選択を求めた設問について、「問 1. 教員が中央線を意識して歩いているか」の結果を図 4、「問 2. 児童生徒が中央線を意識して歩いているか」の結果を図 5、「問 3. 教員が片側通行を守ることに、指導上の意義があるか」の結果を図 6、「問 4. 児童生徒が片側通行を守ることに、学習または社会参加における意義があるか」の結果を図 7 に示す。

回答者の約 89% は、教員の片側通行に指導上の意義を感じており、実際に教員が片側通行を意識しているとした回答は

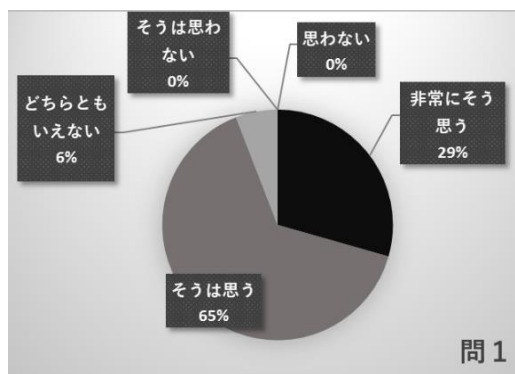


図 4. 教員の中央線への意識

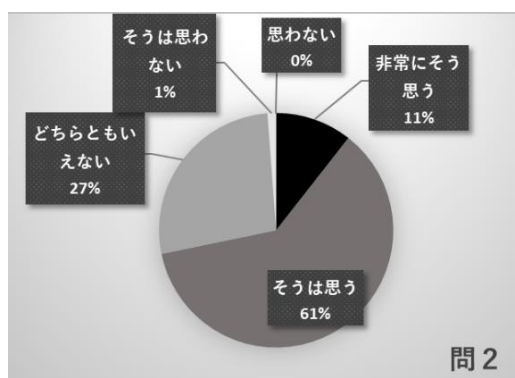


図 5. 児童生徒の中央線への意識

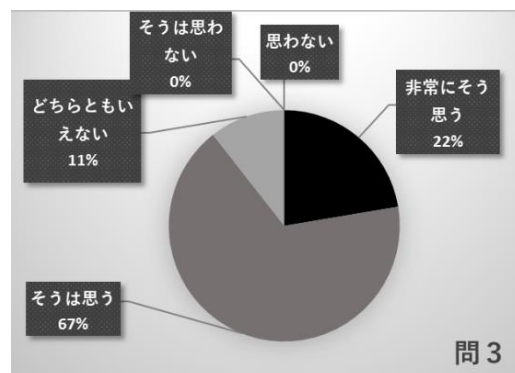


図 6. 教員の片側通行の指導上の意義

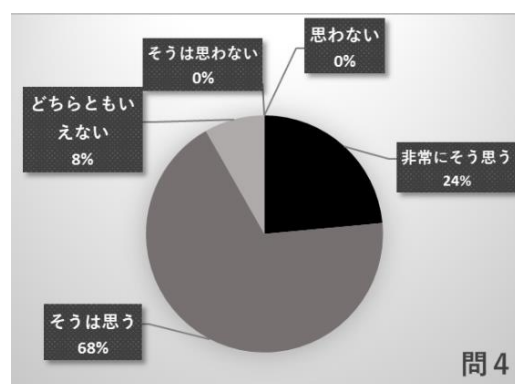


図 7. 児童生徒の片側通行の学習または社会参加における意識

約 94% だった。また回答者の約 92% は、児童生徒の片側通行に学習または社

会参加における意義を感じており、実際に児童生徒が片側通行を意識していた回答は約 72% だった。

さらに、自由記述回答について、テキストマイニングで質的に分析したところ、中央線設置によって「問 3. 教員が片側通行を守ることに、指導上の意義があるか」については、66 名からテキストデータを収集し、異なり語 177 語、出現回数の平均 3.06 回であった。抽出語の出現回数は、「守る」28 回、「ルール」27 回、「思う」24 回、「生徒」21 回、「大人」15 回、「子ども」14 回、「教員」「行動」「児童」11 回、「見本」9 回であった。教員の所属学部を外部変数とし、描画する共起関係上位 50 にした共起ネットワークを作成した結果、表示語数は 28 であった。

全学部に通ずる抽出語は、「守る」「ルール」「思う」「生徒」「大人」「通行」「行動」「見本」の 8 語であった。具体的なテキストには、「大人」の「行動」は児童や「生徒」の「見本」であること、「大人」が「通行」の「ルール」を「守る」ことで児童や「生徒」が「ルール」を「守る」ようになると「思う」こと等に関する語句がみられた。

小学部に特徴的な語句は、「子ども」「児童」「指導」「必要」「示す」「教員」の 6 語であり、特徴的なテキストとしては、「児童」・「子ども」に「見本」を「示す」ために「教員」が「ルール」を徹底する「必要」があること、日常的な繰り返しの「指導」が効果的であること等に関する語句がみられた。中学部に特徴的な語句は、「子ども」「見る」「意識」「危険」「施設」「模範」「説得」「学校」「回避」の 9 語で、特徴的なテキストとしては、「子ども」が「危険」の「回避」を「意識」する学びにつながることで、安心安全な「学校」づくりに必要であること、「学校」のルールを学ぶことは

公共「施設」の利用につながることで、「模範」的な行動を示すことで「説得」力のある指導ができることに関する語句がみられた。高等部に特徴的な語句は、「見る」「意識」「歩く」「先生」「身近」「正しい」「利点」「社会」「教員」「示す」「必要」の11語であり、特徴的なテキストとしては、「正しい」「行動」を「先生」が「示す」ことで「社会」のルールを「意識」できること、校外を「歩く」ときにも「必要」なルールであること、「身近」な生活の中でルールを指導できる「利点」があること等に関する語句がみられた。なお、中学部・高等部に共通する特徴的な語句として、「見る」「意識」の2語があり、教員の行動を「見る」ことでルールを「意識」できること、子どもは教員の行動をよく「見ている」ため、教員が片側通行を守る行動は重要であること等の特徴的なテキストがみられた。

さらに、中央線設置によって「問.4 児童生徒が片側通行を守ることに、学習または社会参加における意義があるか」につ

いては、65名からテキストデータを収集し、異なり語(総抽出語に対し異なる語彙数)250語、出現回数の平均2.86回であった。抽出語の出現回数は、「ルール」47回、「守る」「思う」27回、「社会」24回、「通行」23回、「歩く」13回、「意識」12回、「交通」9回、「学校」「必要」8回であった。教員の所属学部を外部変数とし、描画する共起関係上位50にした共起ネットワークの結果を図8に示す。なお、表示語数は37であった。

全学部に通ずる抽出語は、「ルール」、「守る」、「思う」、「社会」、「通行」の5語であった。具体的なテキストには、「ルール」を「守る」ことは「社会」において必要であると「思う」こと、「ルール」を単純に「守る」ことだけが、「社会」に生きる力ではないと「思う」こと、「通行」の「ルール」を「守る」ことが自分を「守る」ことにつながることで等がみられた。

小学部に特徴的な語句は、「歩く」「意識」「知る」「行動」「参加」「交通」「安全」「繋がる」「決める」「必要」「練習」

「歩道」「人」「安全」「大切」の15語で、特徴的なテキストとしては、学校のルールを「知る」ことや「意識」して「練習」することは「歩道」を「歩く」際などの校外での「安全」な「行動」に「繋がる」こと、「決め」られたルールを「意識」することは「交通」規則を学び社会「参加」するために「大切」・「必要」であること、「人」の流れに合わせることで柔軟な理解も必要であること等に関する語句がみ

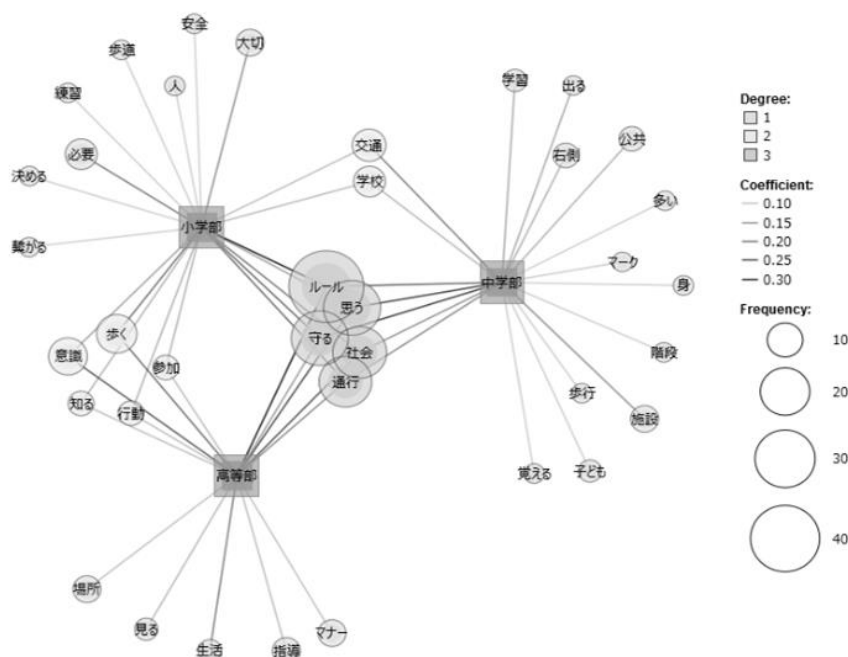


図8. 「児童生徒の片側通行の学習または社会参加における意義」共起ネットワーク

られた。中学部に特徴的な語句は、「交通」「安全」「学習」「出る」「右側」「公共」「多い」「マーク」「身」「階段」「施設」「歩行」「子ども」「覚える」の14語であり、特徴的なテキストとしては、「右側」通行や「交通」「マーク」の「学習」は「子ども」たちが社会に「出る」時に「安全」に「身」を守るため必要な学びであること、ルールを身体で「覚える」積み重ねが必要であること、「公共」「施設」の通路では左側通行のことも「多い」ため「歩行」の指導としては注意が必要であること、本校の「階段」は片方しか手すりがないため「右側」通行だけでは対応できないこと等に関する語句がみられた。高等部に特徴的な語句は、「歩く」「意識」「知る」「行動」「参加」「場所」「見る」「生活」「指導」「マナー」の10語であり、特徴的なテキストとしては、片側通行は「生活」場面で「歩く」際にも必要なルールであること、ルールを守ることは社会「参加」に必要な「意識」であること、色々な「場所」に応じたルールや「マナー」があることを「知る」上で大切な学習であること、先生や子どもの集団「行動」自体が「指導」であり、繰り返しの中でルールが定着すること等がみられた。

IV. 総合考察と今後の課題

本研究では、まず人物動線のVTR撮影を通して中央線設置の効果を検証したが、教員と児童生徒いずれにおいても、中央線だけではなく、視認性の高い矢印や誘導用立体物を設置した条件(レベルⅢ)がもっとも中央線を意識し、片側通行を守っていた。また、一定期間継続した後の調査でも、教員・児童生徒共に85%以上が片側通行のルールを守っていた。VTR分析では、通行する児童生徒の年齢や在籍

学部を分析対象にしなかったため、生活年齢を外部変数とした効果検証はできなかったが、教員アンケートにおいて72%が効果を認める回答であったことから、生活年齢を問わず、児童生徒に対して効果があったと考えられる。また同アンケートの自由記述において、児童生徒が中央線に従い一方通行を守ることは交通安全を含めた地域社会の安全を守る行動の定着であり、社会参加には不可欠な態度・理解であることが指摘された。本研究において「校内安全や利便性を図るためのUDの観点」で中央線やシンボルマークを効果的に提示し、幅広い生活年齢や認知能力に応じた環境を設定できたが、意図された環境における指導の継続によって、社会参加に必要な基本的態度・理解の育成に資する可能性が示唆された。

中央線設置によって教員が一方通行を守ることの指導上の意義については、ルールを守る行動モデルとして意義があるとした意見が全学部でみられた。抽出語としても「守る」、「ルール」「見本」等が高頻度で出現しており、構造物へのアプローチである中央線設置が教員のルールを守る行動やその指導を促す効果があることを、教員自身が実感していることが推察された。VTR分析の結果では、常に教員のルール定着率が児童生徒より上回っていたが、継続の結果、両者の数値を85%以上で維持できたことから、教員のルールを守る行動モデルの提示が児童生徒のルールを守る行動を促進していると考えられる。

一方、行動モデルを示すべき教員の一部にみられたルールを守らない行動を問題視する意見があるように、教員の行動・指導の統一性が課題としてみられた。片側通行を守らない教員について、状況と理由は個々で違うと考えられるが、VTR

撮影記録にもある「ルールによってスムーズな通行ができないジレンマ」が生じていたのかもしれない。一方、ルールを尊重した上での状況に応じた柔軟な対応については、道路交通法の第 17 条第 5 項「中央線をはみ出した通行」の規定があるように、一般的なルール範囲内の弾力的対応の一つであり、その必要性を指摘する教員の意見もみられた。教員、または一部の生徒が、中央線をまたいで「状況に応じた柔軟な対応」をしていたように、ルールを守る基本的態度・理解を育成しつつ、同時に柔軟な対応ができる態度・理解を育成するために必要な指導のあり方については、今後の課題となる。

また分析結果では、小学部で「意識」「練習」「歩道」など生活に身近な語句が多かったのに対し、中・高等部では「社会」「公共」「参加」「危険」「マナー」など公共の社会参加に関する語句が多く、ライフステージによって、学習課題や求められるソーシャルスキルに差があることも示唆された。「将来にわたる地域生活での安全に対応できる学習のためのユニバーサルデザインの観点」から、学校で統一された中央線を設置し取り組みを進めたが、全校的な教員の行動モデルを維持しつつ、児童生徒の発達課題に個別最適化した指導をどのように展開するか、全校的な議論が求められる。

以上のような成果と課題を整理したが、本研究の取り組みをさらに改善し展開するためには、安全教育の一部として、その教育的意義を明らかにする必要がある。

文部科学省(2019)は、『『生きる力』をはぐくむ学校での安全教育』において、学校安全を生活安全・交通安全・災害安全の3つの領域で整理し、地域や関係機関と連携した充実を求めている。まず本研究の取り組みは、安全・安心な学校環境づく

りを通じた生活安全と、通行ルールの意識向上等による交通安全の両側面において、その充実をめざした指導として評価できよう。この取り組みを限られた場所・時間における学習活動として留めることなく、様々な学習活動と関連づけることで、地域生活の生活安全や交通安全の充実に寄与することは十分に期待できる。

一方、教員アンケート結果にもあったように「危険回避」等の非常事態への対応に関しては、課題が残されている。これは災害安全とも関連する課題ではあり、非常時を含めた多様な状況に応じて柔軟な対応ができる態度・理解の育成は、安全教育において重要な観点になる。この課題を踏まえた取り組みのあり方については十分に議論する必要があるが、中央線による片側通行ルールを設定したからこそ、通行状態に規則性が生じ、その結果として柔軟な対応や非常事態への対応の課題が明らかになった。今後の安全教育に関する検討では、通行ルール設定自体の教育的意義や有効性を十分評価した上で、設定された環境を活かした具体的な指導観を共有し、取り組みを進めることが重要になる。

最後に、地域生活への連続性の観点から、本研究の取り組みを考察する。文部科学省(2016)が「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」において、「社会とのつながりを重視しながら学校の特色づくりを図っていくこと、現実の社会との関わりの中で子供たち一人一人の豊かな学びを実現していくことが課題」と指摘しているように、社会との関わりを生活の中で学べるような学校教育のあり方が、現代的課題となっている。本研究では、通路の中央線設置の取り組みについて、安全性の変化

及び安全教育上の教育的意義を明らかにしたが、設定段階から地域生活との関連を意識しており、この取り組みを通じた学びは、児童生徒の学校生活だけでなく日常生活にも直結している。しかし、吉岡・竹川（2019）が交通安全教育上の課題として指摘する「児童生徒の交通社会での経験不足」に対応するためには、社会への連続性や日常生活における実効性を意識した教員の指導の重要性が明らかになった。今後は、児童生徒の学校での学びのその先を見据え、安全教育の観点から環境設定を検討するだけでなく、地域生活への連続性を踏まえた指導のあり方を学校全体で検討したい。

引用・参考文献

樋口耕一（2020）社会調査のための計量テキスト分析 ―内容分析の継承と発展を目指して― 第2版，ナカニシヤ出版
村上佳司・堀清和・宮田美恵子・小川和久・鈴木彬文（2018）障害のある子たちへの交通安全指導上の課題，國學院大學人間

開発学研究，9，143-152.

中央教育審議会（2016）幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）

<https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.html>，（閲覧日 2022年2月15日）。

文部科学省（2018）特別支援学校学習指導要領解説<https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/newcs/youryou/1278527.html>，（閲覧日 2022年2月15日）。

文部科学省（2019）「生きる力」をはぐくむ学校での安全教育，学校安全参考資料<https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anzen/1416715.html>，（閲覧日 2022年2月15日）。

吉岡学・竹岡久美子（2019）特別支援学校における知的障害児の交通安全教育の実態と課題，実践人間学，10，12-19.

Efforts for Safety Education by the Passage Center Line at Schools for Intellectual Disabilities

-From the Perspective of School Environment Universal Design-

In this study, in the special needs school where children with intellectual disabilities are enrolled, a central line was set up in the passage from the viewpoint of universal design of the school environment, and it is educational from the viewpoint of safety improvement and safety education. The purpose was to verify the significance. As a result of installing arrows and three-dimensional objects for guidance in the passage in addition to the central line and conducting verification by VTR photography of the person's flow line, both children and teachers generally increased their behavior according to the one-way traffic rule. In addition, as a result of conducting a questionnaire to teachers to clarify the educational significance of establishing the Chuo Line, it is important not only to improve the safety of the school but also to teach rules that are in line with society on a daily basis. There were opinions pointing out the educational significance of sexuality, the rules necessary for social life, and raising awareness of danger avoidance. On the other hand, issues for enhancing safety education, such as the need for flexible understanding to comply with various rules in social life and low awareness of teachers' rules that should serve as action samples, have become clear. In the future, it is necessary to improve the school environment and promote safety education from the perspective of universal design, based on the perspective of connecting to the diversity of society.